日本語文化をになった人の、ある系列

林　四郎

今日の学界常識では学問的業績を残したと目されていない人、場合によっては、学界に名さえ記憶されていない人の中に、私の目から見ると、大変りっぱな業績を残している人がある。もちろん、標題に記したように、日本語できずく言語文化に関係してのことである。

私は、もっぱら自分の問題意識によって、古本をあさる。そのとき、はじめから、だれの何の著述と知られている本を見ることには、あまり興味がない。そういう本を手に取るときは、心が義務的になっているので、楽しくない。

楽しくないときには、発見がない。著者の名は知らないが、内容がおもしろそうだと思って見るときには、目がページに吸い寄せられる。

そんなふうに吸い寄せられて買った本で、まだ著者の名が記憶にとどまらぬことがある。後日、また、そのようにして手元に来た本の著者が、三冊目ぐらいに、やっと同じ人であることに気づくことがある。そういう著者に出会うと、これはよほど自分と性の合う人なのだなと思って、うれしくなるのである。

そのように性の合う著者の中で、一冊目から名を覚えた人も、もちろん、ある。そういう人の場合には、二冊目に出会った本が、またまたぴったり来たときに、もう、その著者との連帯が、しっかりできてしまう。

以下に名を記し、著書を紹介するのは、いずれも、私が、妙に性が合うことによって、すっかり好きになってしまった人びとである。

石川鴻斎

この人は、無名の人ではない。明治の中期に大いに名を知られた漢学の先生である。しかし、今日、漢文学界に名を残しているようには思えない。

江戸時代以降の漢学者には、伊藤仁斎のように漢籍そのものの研究が深くて、中国での研究者に劣らなかった人がある一方、頼山陽のように、漢詩文の創作に非常な力をもち、日本外史のような大著作を、文学作品として残し得た人もある。そういう、仁斎や山陽のような大山脈の間に、江戸の中期から末期、明治の初期にかけて、

漢文、漢語、漢字を研究して、日本人の日本語文化を厚くするのに働いた人たちが、かなりの数、あるのである。伊藤東涯の『操觚字訣』、荻生徂来の『訳文筌蹄』、皆川淇園の『実字解』『虚字解』、新井白石の『東雅』といったものは、その雄たるもので、これらを知らぬ人はあるまい。

明治の人、石川鴻斎は、まず、漢文の文章を日本人に親しませるために、よく文章研究をした人である。明治十八年に『纂評精註唐宋八家文読本』を鳳文館という書店から板行している。唐宋八家文の板本は明治になって実に何種類も出ているが、私は、この本ぐらい見やすい文字の本を知らないのである。今日の教科書体といわれる活字と非常によく似た字体で彫られている。木版だろうと思うが、活字のように字形がよくそろっている。

印刷のことは書店の問題で、いかに読みやすくても、それが著者の功績というわけにはいくまいが、テキストの注の入れかたの適度さは著者の功である。古人の注は「文法」を主としているが、箇々のことばの意味がわからなくては話にならぬから、この本では、字義や事実の注解を先にし、それに文法の注を加えたと序文に述べている。文法とは、文章技法のことで、江戸時代の漢学者は、中国での用法に従って、文法ということばを、みなそのように用いている。

字義や事実の注解は、割注の形で、本文の中に入れ、文法の注は、本文のわきに、いわゆる傍注としてそえている。例えば、韓愈の「原道」という文章は、「博愛之謂仁、行而宜之之謂義」という二句で始まるが、このわきに「握定仁義作主此単刀直入法也」と注してあるのが文法の注で、最初に仁と義とをかかげ、それを明確に定義して一編の主題とした、こういうやりかたを単刀直入というのだと説明しているのである。

欄外の頭注には、中国諸家の文法評が紹介してあり、各文章の末尾には総合評が、先人の語を引きつつ、加えてある。

こういう、読本のテキストの形は、極めて一般的な形式に従ったもので、何も新工夫があるわけではないが、字義の注釈の箇所が多すぎず、注の文句が簡潔で、本文のまとまりの印象がくずれないのがいい。注に助けられながら、しかも、注に邪魔されずに本文が読めるというのは、実に、読本テキストのそなえるべき条件として、大事なことである。

石川氏は、明治十七年に、『文法詳論』という一書を博文館から出している。

この書は、斎藤拙堂の『拙堂文話』や海保漁村の『漁村文話』の流れを引く文話ものであるが、上下二冊、二百ページの中に古来の文例をたくさん引いて、よくまとめてある。「論言」「警戒」「弁体」「句解」「助字例」「論文類纂」の六項目から成っている。論言は総論。警戒は修辞技法の大事な点を述べ、弁体は、中国文特有の文章諸体の解説。句解は文の解剖、助字例は、助字の中から「也」「矣」「焉」など、極めて大事なものをとって用法を解説する。論文類纂は名文章のアンソロジーであるが、拙堂以下日本人の漢文も入れてある。いちばんおもしろいのは句解で、四書五経や八家文あたりの文からサンプルをとって、文の形を次のように図解する。例えば、孝経の「夫孝天之経也之誼也民之天地之経而民是則之」という文は、

夫孝レハ―┐ 天之経也。
　　└地之誼也。
└民之行也。┘―天地之経。而民是則レ之。

という構造になっていて、それは、

発語二字、生三短句、以一長句結レ之。

と解かれる。すなわち、「夫孝」という二字の発語が「天之経也」以下三つの語句を生じ、「天地之経。而民是則之」という長句がこれを結んでいるというのである。

バランス感覚を大事にする中国の文章は、たしかにこういった対応や照応の連続でできているわけで、こういう文章リズムを身につけることが、むずかしげな漢文文章の流れを自然に呼吸するようにさせることになり、それがまた、自分が文章を作るときの調子を会得させることになるのである。

石川氏はまた、明治二十年に、博文館から『篆文詳註日本大玉篇』三冊を刊行している。これは、中国に発し、日本でも「和玉篇」としてしきりに発行された漢字字典の主流『玉篇』を明治になって継いだもので、部首によって字を配列し、古典籍中の用例や説明によって情報を与えたものである。上欄に説文解字を収録してあるのが大変なサービスである。こういう玉篇のような著作は、古来の記録を受けつぐ仕事であって、編著者が創作する部分はあまり無いものであろうが、各漢字に訓を付するところに、中国の人にはわからない苦労があるわけで、玉篇を利用する一般の日本人は、おそらく、古典籍からの引用の部分は、何となく字づらをながめる程度にすまし、専ら、訓を求めて用を足すであろう。この「大玉篇」には、なかなかたくさんの訓が採録してある。例えば、「暁」という字には、

アキラカ　アカツキ　シル　サトス　ミツル　トク　アフ　コヽロヨシ　サトシ

「暴」なら、

カワカス　ソコノフ　アラシ　スカス　ニハカ　ヨコシマ　イソガシ　テウツ（手で打つということらしい）アラハス　サラス

という訓があげてある。各種の例句や説明からこれだけの訓をさがし出すのはたいへんである。

それから、石川氏の、著作ではないが校閲となっているもので、「戸田翠香纂修、岡本文造、谷本亀二郎分修」とされる『文章字典』（明治27年、博文館）という本がある。ハンディなものだが四百八十余ページの中に細字で実にたくさんの情報が入っている。これは漢字による完全な国語辞典で、漢籍の用例を引いてはあるが、それの解説にはことばを費さず、字と語についての説明に力を注いでいる。排列は節用集の論理に従い、ただし、いろはではなく五十音（明治27年で五十音順を採用しているのは、かなり「新しい」というべきなのである）により、音節数の順序で単語を並べている。一例を引けば、「ア」の四音の中に「アラタム」とあり、最初に「改」の字があがっている。その説明はこうである。

コレマデノヿヲ切カヘテスルヿ。モノヲナヲスナリ、但シナヲスニ二ツアリ、ユガミヲナヲスハ正ノ字ナリ、シナヲスハ改ノ字ナリ。〔論語〕過則勿憚レ（改）更改　変改　改換　改易　替改　渝改　悛改ナト連用ス、雅俗共ニ用ユ。

当時のことではあり、漢字の辞典であってみれば、同訓異字の使

い分けに注意が行きすぎるのはやむをえぬことであるが、それよりも、ことばの意味や用法の解説がくわしいのが、大変ありがたいのである。国語と漢語との漢字を通じての連続性、文体上の特徴にも言及してあるのがよい。

私はこの字典から非常な恩恵を受けている。

岡　三慶

これも、漢学を身につけた人であるが、石川氏よりも一段と大衆的な人であるように思える。この人こそ「文法」のために一生を送った人であり、今日の学者には全く名を知られない人である。

おそらくこれが岡氏の処女作なのだろうと思うが、『文章軌範文法明弁』という和本が、明治八年の版権免許、明治九年出版（これが巻之二まで、巻之九は同十三年出版）で世に出ている。岡氏は森田節斎を先師と仰ぎ、節斎の講述を受けとめたものだとして、文章軌範に収める諸文章の「文法」を、いともくわしく説くのである。

中国で、古典籍の文章や六朝唐宋諸家の文章について「文法」の研究がさかんであったのは、明清両朝の間である。明の帰震川が『文法七十七則指南』というものを書いているそうだ。調べてないので、本当にそういう原著があるか、知らない。原著は別の名前なのではないかという気がするが、岡氏は、これを「補訳」して、明治十二年に、この名の書を出している。相生社という所から出た木版本である。小冊子の中に、修辞上の教えが、七十七項目述べてある。文章の実例は無く、例えばだれの何という文章という程度の示しかたで、抽象的に述べてある。しかし、それで、わかる者にはわかるようになっている。例えば、「問答ヲ設ケ為スノ則」という項では、いきなり答案を出さないで、先ず問うてから、問われて答えを出すようにするやりかたを紹介し、そのやりかたは孟子に学べという。これで十分わかるのである。

岡氏が自分でたくさんの文章を集め、思うように文法を論じた書物が『文法学講義』（明24治年、益友社）である。これは、六百五十ページに及ぶなかなかの大著で、全部話しことばで書いてある。実際に弟子を集めて講義したものらしく、「自講自筆」とうたってある。実におもしろい本である。

修辞上の徳目を二百七十九項目にして講じているが、用例は必ずしも漢籍だけでなく、平家物語や浄瑠璃の文章、馬琴の読み本や春水の人情本など、硬軟さまざまの文章を出して作文法を論じている。

例えば、文章の起筆は、理の当然のことを言って入って行くのが正攻法だが、時には人の意表に出ることを言って入って行くこともある。韓愈の「送温処士序」は「伯楽一過二冀北之野一、而馬群遂空」と起される。これは、

伯楽と云へる馬の良不良を知る名人が一度冀北と云へる名代の牧野を通り過きしに依て、群集する馬が俄に空虚になりました、

ということだが、

諸君考ひて御覧よ、幾羅伯楽が馬の良不良を知るの名人なれば迚、一度牧場を通り過ぎたれば迚、群集する馬が空虚になるべきの理無き事を、今然るに一筆書出すと直に空虚になると云ふは、豈と十方十鉄も無い言ひ方ならずや、斯く書出しに於て突然十方十鉄も無い事を言て、文章の端を開らくを、逆起起法と

申します

と言って一つの文章技法を説明する。随分勝手な言い方や書き方をするところから見ても、あまりきちんとした学者ではないことがわかるが、とにかく懇切に説明してくれる。私がかつて「頂釘回環」という技法を、この書から大変学んだことについては、前に筑波大学文芸言語学系の紀要（「文芸言語研究・言語篇4号」所収「文章論と修辞学」）に記したことがある。

岡三慶氏の『正続文章軌範文法講義』洋本千二百ページが博文館から出たのは明治三十二年である。この本も、例によって割注と頭注とで字句や文法の注解を施しているが、そのほか本文中に、さまざまの傍点、傍線、区切り符号、括弧などを入れて、文章の修辞的な構造を示そうとしている。

岡氏の説く文章技法が本当にその通りのもので、それだけの効果を挙げているのかどうか、つまり、岡氏の言うことをそのまま信じていいのかどうか知らない。むしろ、私は、あまり信じない。しかし、それは、どうでもいいことなのだ。文章の内容を読みたければ、自分で読む。技法あの手この手が、これだけ、ここにあるということが、私の文章観を作る上に、非常に役に立つことなのである。

小宮水心

この人の編著を五冊持っているが、何冊目に著者を認識したか、よく覚えていない。多分三冊目あたりであろう、国民の文章指導に熱心な人だった。明治四十年八月に岡本偉業館という書店から『美的三体記事文』というものを出している。一見したところ、何の奇もない、文集による文章作法書である。この種の本は実に五万とあるから、「なんだ」と思って見すごせば、それっきりなのだが、「三体記事文」の「三体」とは何かと追って見ると、この本の特色がわかって来る。三体とは、

一は和文風、漢文流、又は和文と漢文と折衷体のもの。一は言文一致で、ある、です、しました式で、他の一は候文式である。

となっている。和文と漢文とをそれぞれ一体に立てるのかと思うとそうではなく、和文漢文を、むしろ一体のものとして立て、それに、言文一致と候文とを立てて三体としている。このように三体に書き分けるのは、ただの物好きではなく、

すべて初学の人は一題目について工夫するに苦しむから、思想は一つ二つに止まらぬと云ふ証拠にと思うて、趣向を異にして同題のものを三体に書きわくる事にしたのである。

というのが趣旨である。

伝統的な類題和歌や俳諧歳時記のように、春夏秋冬で文題になりそうな項目をかかげ、各項目に三体の文章をつけてある。例えば「蝉」という題では、まず、蝉をどういう角度からとらえたらよいかという解説が数行あってから、まず和漢折衷文で

さらぬだに、暑さに堪へかぬる真昼、……

という調子の文章があり、言文一致では、

今度の宿題は蝉と云ふ文題なので、いろ〳〵工夫を凝して居た。ところが、弟と妹とがやって来て、それは〳〵酷い議論。といって始まり、蝉は暑さがやりきれなくて泣くのだ、泣くのではない歌うのだと言って議論しているうちに夕立が来て、さっとあがった。とだえていた蝉がなき出したら、弟妹も議論を思い出した

が、今度は、異口同音に「あれ蝉が喜んで鳴いて居る」と言った――というようなことが書いてある。

そのあとの候文は候文らしく行儀よく書いてあるが、言文一致のところが、いちばん写実的で描写が生きて来るのは偶然ではないようで、文体を変えることにより発想の転換に導こうとするこの書のねらいが見当ちがいでないことを思わせる。

同じ明治四十年の十月に、同じ著者が同じ書店から同型の本『韻文と美文』を出している。これも春夏秋冬で花鳥風月的に行くところ、格別新味はないが、やはり、ただの詩文集ではなく、「題」「想」「詞」という三つの着眼点を与えて、漢詩と新体詩の作り方を教えようとしているところに、一つの方法化を見ることができる。

小宮氏は、三体で押すのが好きな人で、大正十三年に大阪の立川文明堂から出したものに『三体書翰文』がある。この三体は、漢文体、口語体、候文体であるが、候文体には、通俗体と美文体とを区別するので、結局四体になっている。例えば「西瓜を贈る」の四体文例は、次のとおりである。

〔漢文体〕今日も亦炎暑酷なり、足下如何して之を消する。此瓜、吾が圃に生ぜる物、斯かく藍面と雖も、中に赤心あり。今之を貴厨に奉呈す、笑留せば幸甚なり。

〔口語体〕暑い真昼のお慰みにと、之を進げます。実は出入の百姓から貰つたのですが、名高い某地の産ですから、中肉の真赤なのは申すまでもない、甘い事も保証しておきます。之は持つて来て呉れた、爺の言葉の受売ですよ。

〔候文通俗体〕今日は昨日にまして暑く候が、御様子如何、伺ひ上げ候。これは珍しき物にも御座なく候も、例により田舎の親類より到来の西瓜、一個御分配致し候。味の如何は、冷して後御試験願はしく候。草々。

〔候文美文体〕進呈すればとて、自慢の様にござ候も、実は曰く附の此西瓜に候。そは余の儀にも之れなく、一度真二つに割きて試みしが甘く、今一度と取寄せたる二個の中の一つ、中肉の如何、何遍も叩きて試み候も保証の印は押しがたく、兎も角も僕が寸志は、割きて後御承知願はしく候。

原文には総ルビがあるが、引用に当って、すべてはぶいた。この限りでは、候文体の通俗体と美文体の区別など、明らかではないが、これもことばのスタイルの上の区別というよりも、話題のとらえかたとして、ドライなのが通俗体で、多少とも趣好をこらそうとするのが美文体ということらしい。

この本は、ふつうの書簡文範より実用的でもあり、発想開発のおもしろみもあって、なかなか棄てたものでない。

私が四冊目に接した小宮氏の編著は、これも立川文明堂の印行になる『註解日本外史』であった。明治四十四年の発行である。日本外史を書き下し文にせず、原文のまま印刷しているのであるから、これは、山陽の著であって小宮氏の著ではない。小宮氏は註解者たるにすぎないが、この本のテキストの整えかたが、大変いい。頭注が二段になっていて、上の段には、年代と人名だけが抜き出して記してある。下の段には、語句の注解がしてある。これが、下の本文と、位置がずれないように選んであるところが、最も苦心の要ったところであろう。この、注解の選遂のおかげで、本文が注解に割り込まれることが、無く、本文の読みが中断される気づかいが全く無いのである。これは実に大事な配慮であって、私は、日本外史を読

むなら、是非この本で読もうと思っている。

小宮氏にいよいよひかれたのは、最近入手した漢和辞典のためである。これは大阪の田中宋栄堂から出た『増訂改版漢和大辞典』で、最初の版が出たのはいつか知らないが、増訂改版となったのは大正六年である。

この辞典には、はっきりした特色がある。その一つは、各字の字解に、字源解説を一切入れないかわりに、意味の解説をくわしくしていることである。「名」「動」「形」というように品詞別をはっきりさせている点、その字義を日本語として受けとめるときにどういう形になるのかがはっきりしてよい。日本人が作る漢和辞典として高い見識をもつものと評価すべきである。第二に、各字の語釈にも、熟語の語釈にも、漢籍の出典文例を一切挙げてないこと。これは、人によっては、欠点だとするかも知れないが、日本語のための漢字辞典であることに徹すれば、これは要らないし、無い方がすっきりしていて使いやすい。漢籍を読むための漢和辞典は、ほかにあるのだから、一方に、それを棄てた漢和辞典があっていいのである。

啓蒙家というと何だかひびきがわるいが、小宮氏は、国民をばかにしないで国民レベルの目を持つことのできた正しい啓蒙家だったと思う。

三　浦　圭　三

この人の名前は、本を買う前から知っていた。古本屋でこの人の名のある分厚い本をよく見かけたが、学者としては聞えていないので、手に取る気にならなかった。しかし、ある時『綜合新文学概論』という本を開いてみると、甚だ読む気になった。文学とは何かということを極めてたくさんの事例で、まことに多くの方面から論じている。日本文学、西洋文学、過去の文学、現代の文学、何でも出て来るし、哲学やら心理学やら、いろいろにぎやかである。筋のいい学者なら決してやらない、こういう何でもござれ式の論じかたを、平気でどんどんやってしまうところに、先ず、同業の学者とか、学会とかを相手にしていない気持よさを、私は覚えた。

それも、筋が通っていなければ、いかに私でも感心はしないが、三浦氏の論述には、間うて求めて行く深まりを感じさせるものがあり、やたらに並べているのとはちがうのである。文学を論ずるということは、自分の心に問う以外にはないものと思うので、心の求めに従って、その人なりの哲学へも心理学へも行かざるを得ないのは、やむを得ない。こういう本を読みながら、自分もいっしょに、あっちこっちへ飛んで考えるのは、まことに楽しいことなのである。この書は昭和三年に啓文社から出ている。

『綜合国文学概説』は、大正十四年に文教書院から出したもの。これはまた千ページに達する大著だが、作品の引用をたくさん含んでいるから、大きさは驚くには当らないとして、作品のあとを追っかける解説でなくて絶えず国文学の理論を出そうとしているところに、考えるおもしろさを感じる本である。そして何よりいいのは、言語形式への注目が忘れられていないことである。

三浦氏の文学の本には、このほか『綜合日本文学全史』『古今和歌集新講』『標準大鏡』などがあり、前の二つはまた大部なものだが、これらはまだ手元にそなえていない。

そして、実にこの人らしいのは『綜合日本文法講話』（大正15年

啓文社）である。ふつう、文学を説く学者が語学を説くことはしないものであるが、三浦氏は、そういうことには全く頓着しない。

この書の文法学説に、恐らく、新味や独自性はないだろう。国語学者がこの本を読んでおかなくてはならぬということはあるまい。しかし、この書の説明はおもしろい。例えば、副詞の「意義」をこんなふうに説明する。

春は再びかへれども、君は決してかへりまさず。

などの語句に於て、附圏の語は、それ〳〵繋線の語を限定してゐる。

春はかへる。どうかへるか、再びかへる。

君はかへりまさず、どうかへりまさぬか、「蓋し」か「恐らく」か「多分」か「或は」か……決してかへりまさぬ。

こういう説明法は、教壇で実際に学生生徒にわからせようとして苦闘した人でなければ、思いつかないものである。

三浦氏は弘前高等学校の教授であった。この人の書くものは、たいてい文部省教員検定受験者を第一の目標にしているようだ。三浦氏のものに限らず、教員検定試験用の参考書は実に懇切にできているのが常で、私は、その種の本から恩恵を受けることが多いが、三浦氏のものには、これら受験用書のきまじめさに加えて、自分の疑問に従う自由な発想が満ちているのが何とも楽しいのである。

秋山蓮三

この人は国文学者でも国語学者でも漢学者でもない。理科の先生である。

ある時私は、『内外普通脊椎動物誌』（昭和10年、受験研究社）なる一書を入手した。脊椎動物の動物図鑑のようなものだが、動物誌というとおり、図よりも文章の方が多く、千余ページに読み物がぎっしりつまっている。例えば「すずめ」の項目には、形態とか分布とか習性とか、一応それらしいことを記したあとに「雀に語学を教へる学校」という項目があり、名古屋、熱田神宮の森のほとりに竹内蘇言という人が一人住みをして、すずめに人間のことばを教えている話が細字で四ページにわたりくわしく書いてある。すずめが人語を話すわけではないが、竹内氏の指示どおりに、動作をしたり、漢字を書いたカードを正しく選んでもってきたりする話である。また、竹薮とすずめとはどんな縁があるかとか、現在「雀のお宿」をしている京都伏見のある家の話とか、とにかく、ふつうの動物図鑑や動物学の本には決して書いてないことが書いてある。

この秋山氏は同じ受験研究社から『参考動物学』『参考植物学』『参考鉱物学』『参考博物通論』『参考生理衛生学』と、理科各方面の参考書を出している。その広告文に「秋山先生が多年中等教育界に尽瘁せられ……」とあるから旧制中学校の先生であったことがわかる。そして、これらの本は、やはり検定試験受験用の参考書として書かれているようだ。私は、『参考生理衛生学』（昭和7年、受験研究社）を入手できた。私は人体の生理衛生にはあまり興味をもたないので、この本を、そうおもしろがって読むことはないのであるが、一目見て知識の構造がわかるように、徹底して箇条書きにより、項目にはゴシック活字を使って明瞭に書いてある、この書記法が、大変参考になる。

一体、説明文を要領よく数くことは、文学系の学問をした者より、理学系の学問をした人の方が、はるかにうまい。われわれは、

そういう点では、実にだめである。極く最近も、木下是雄さんという学習院の先生の『理科系の作文技術』という本が中公新書から出て、かなりの評判を取ったが、こうなるのも決して偶然ではないのだ。

飯島魁・横山又次郎

この二人は、大変筋のいい、学問の大先達である。飯島魁(いさお)氏は動物学の権威であるから啓蒙家でも何でもないが、ここに、石川氏以下の人と同列に並べて紹介するのは、『動物学提要』(大正7年、大日本図書)という本を文科系の人間の目で見て、説明文の手本と思うからである。これは研究書ではなく教科書である。動物学の分類項目に従い、たくさんの図を入れて、各動物の身体構造を説明しているが、一字の無駄もない整然たる説明がみごとである。秋山氏のおもしろい記述とは対照的で、実にそっけないのであるけれども、説明の筋のよさがわかりやすさを生じている、そんな名文の詰まった九百五十ページである。

飯島氏は東京帝国大学の先生だったが、横山又次郎氏は早稲田大学の地学の先生だった。地学という名は、当時まだ無い。天文学に並んで陸文学とか地文学とかいったようである。横山氏は、『天文学講話』(明治35年、改訂大正3年)、『人文地理学講話』(明治43年)、『海洋学講話』(明治44年)、『陸文学講話』(大正2年)、『前世界史』(これは今日いう古生物学の本)(大正7年)、『地質学概要』(大正8年)、『自然地質学』(大正11年)と、現在から見ればまことに他方面にわたり、たくさんの著述を残した。いずれも早稲田大学出版部から出ている。地学の先駆的な学者で、決して啓蒙家ではないが、文章家としての横山氏には啓蒙家の性格が十分にそなわっている。本当に読みやすい文章の連続である。おもしろい説明文たるの点において、名篇の聞え高い丘浅次郎氏の『進化論講話』(明治37年、開成館)と並ぶであろう。

以上、ここに並べた各氏の各書、これを「ある系列」と称したのは、いったい、何の系列であろうか。それは、幸いに読んでくださったかたの、ご想像にまかせたい。